

合併後2年を経過した新居浜市別子山地区の変容

1. はじめに

愛媛県は、平成の市町村合併の先進県として知られている。平成15年3月の70市町村が現在は23市町となり、今年8月にはさらに4市町による合併が予定され、最終的には20市町となる。平成11年3月から平成18年3月までの市町村減少率では広島県の73.2%（86市町村が23に）に次いで愛媛県は71.4%と高くなっている。

本稿では、県内のトップを切って平成15年4月に新居浜市と合併した旧別子山村を訪ね、合併後2年経過した行政制度や地区の変容について概要を報告する。

2. 地域の概要

別子山地区は、新居浜市中心部から大永山トンネルを經由して約1時間、四国中央市中心部（三島地区）からは法皇トンネルを經由して約40分の距離で結ばれている。吉野川水系銅山川の源流に位置し、周囲を1,000m級以上の険しい山地に囲まれ、平野部はほとんどなく、林野面積が地区の97.2%を占めている。集落は標高平均600mの山間に散在しており、主な産業は林業と観光である。

別子山村が江戸末期以降、銅山によって栄え、閉山とともに過疎化・高齢化が進展したのは言うまでもな

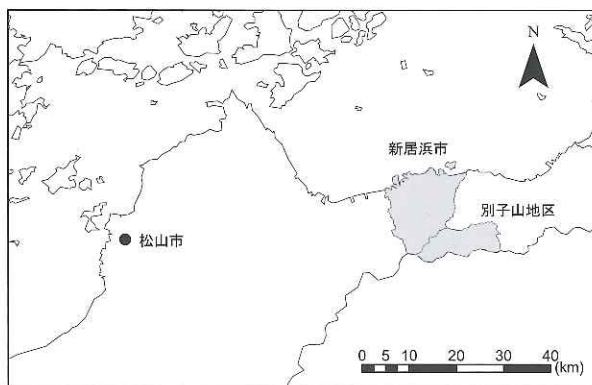


図1：別子山地区の位置



写真1：支所周辺に郵便局や駐在所など公的機関が立地



写真2：保土野集落の別子小・中学校、公民館、ふるさと館

い。表のとおり、人口は一貫して減少を続けており、最盛期には12,000人を超えていたが、平成12年の国勢調査時での人口は277人、高齢化率は34.7%であり、西日本でもっとも人口の少ない自治体であった。

3. 合併の背景

旧別子山村を含む宇摩地区2市2町（旧川之江市、旧伊予三島市、旧土居町、旧新宮村）では、昭和60年頃から合併の論議があった。合併特例法による合併議論や愛媛県の合併基本パターンでも、旧別子山村は宇摩地区との合併が検討されていた。しかし、住友・銅山という歴史的・文化的な繋がりを重視し、新居浜市

表：旧新居浜市、旧別子山村の人口の推移

	昭和45年	昭和50年	平成2年	平成12年	平成22年	平成32年	平成42年
旧新居浜市	126,033	132,339	129,149	125,537	117,474	105,387	91,090
旧別子山村	959	397	318	277	201	139	91

資料：平成12年までは国勢調査、以降は日本統計協会「市町村の将来人口2000～2030年（5年ごと）」

との合併を選択した。平成12年に役場が実施した住民アンケート調査では、合併賛成が47.6%、合併反対が33.7%、相手先は、新居浜市が39.0%、宇摩圏域が28.9%、東予全体が4.9%となり、新居浜市との合併を望む意見が多くなっていた。

さらに、地方分権が進む中で事務権限が国から県、市町村へ委譲されると、別子山村のような小規模自治体では実質的に運営できず、行政体制のあり方について議論されていた。職員の間では合併しか生き残り策はないという意見もあがっていた。

平成14年1月に、法定合併協議会設置の準備会を設け、3月の両議会でも可決し、4月1日の設置に至り、7回の合併協議会の後、翌平成15年4月1日に合併を行った。編入合併のため、合併協議は約1年で順調に進んだと言われているが、当時の職員数は特別職を含め19名であり、一人が多くの業務をこなしていたため、各担当課との協議では、多くの苦労があったという。

4. 合併後の変容

平成17年3月末の地区人口は234人で合併当初（平成15年3月末262人）より約1割減少した。これは、自然減に加え、合併時点で村の森林組合が解散したことや異動による役場職員とその家族が新居浜市中心部等へ転出したことが大きな要因である。

行政機能は、旧別子山村役場が、合併後に新居浜市経済部別子山支所となっている。経済部所管となっているのは、支所業務が住民への窓口業務のほか、観光、林業、国土調査など多岐にわたっているためである。合併当初は正職員13名、臨時職員2名の15名でスタートした職員数は、現在、正職員10名、臨時職員2名の計12名となっている。毎年新居浜市本庁との人事交流が行われており、今年度は1名が本庁から異動した。

なお、緊急時の別子山地区への到着時間等の理由により、警察は四国中央警察署の管轄、消防・救急は従来どおり四国中央市側に一部業務を委託している。

現在、新市建設の基本方針である「共に創る自然の営みと人の営みが響きあうまち」を目標に、各種施策が進められ、合併後に発足した地域審議会による意見も反映されている。

合併の主な効果としては、新居浜市との消防無線が整備され、緊急時の対応が強化された。また、旧村時



写真3：新居浜市別子山支所（旧別子山村役場）

代は保健師と看護師のみ常駐していたが、無医地区対策として、医師会による診療所が開設された。週1回（午後）診療所が開設し、医師が一名派遣されている。週1回ではあるものの、医師がいる安心感は、住民からは好評を得ており、今後の安定した運営が望まれる。

次に、新居浜市中心部とのコミュニティバスの試験運行が計画された。合併前より公共交通機関は四国中央市方面へ一日3往復の定期バスが運行されているが、新市建設計画に基づき、平成17年6月から3ヶ月間、一日2往復試験運行し、需要などを調査している。大人200円、小人100円の料金で通勤・通学や通院、買い物などに利用しやすいダイヤが設定され、利便性向上や18年度からの本格運行の実施が期待される。



写真4：週一回開設される別子山診療所（福祉センター分館内）

住民の話では、この他、し尿処理料金が新居浜市側となり、合併前より安くなったことなどが効果としてあげられた。

観光面では、広域へのPRができるようになり、宿泊、体験、交流の中核施設「ゆらぎの森」や宿泊施設「筏津山荘」の利用者数は、旧新居浜市からの来訪を中心に3倍以上増加した。また、春夏の赤石山系への登山客、旧別子銅山へのハイキング客も増加している。

一方、これまでのような住民一人ひとりへの手厚い対応は困難になったほか、40歳未満のUターン者への報奨金や新生児誕生の祝い金といった定住促進施策や村独自の高齢者年金は廃止となった。国民健康保険料や各種の使用料、手数料を同額にするなど、住民負担が増加することには不満があげられた。

また、各自治会に一律支払われていた補助金も旧新居浜市の制度に統一されたため、これまでのような自治会活動が行えなくなり、地区の祭りやイベントなどのコミュニティ活動の縮小を余儀なくされた。



写真5：ゆらぎの森の宿泊施設（ゆらぎ館）



写真6：直径45mの大パーゴラ（藤棚）

5. まとめ

新居浜市・別子山村の合併は、小規模かつ編入合併のため、地域に大きな変化はみられなかった。現在、新居浜市街地との主要地方道「新居浜別子山線」鹿森ダム北側のループ橋（青龍橋）建設が進められ、平成19年度完成予定となっており、別子山地区への観光客や定住人口の増加が期待される。

両地区には、住友・銅山とともに栄えた歴史や文化を大切にする意識が根付いている。今後は地域審議会等の住民の意見や要望をふまえ、重点施策である交流・定住人口の増加、森林や別子銅山跡など豊富な地域資源を活用し、林業や観光振興策が実現することを期待したい。

また、合併で削減された補助金や縮小された事業を補うためにも、住民が自治意識を強め、主体的にまちづくり、コミュニティ活動を進める必要があろう。

（当センター研究員 新藤博之）



写真7：改良中の主要地方道「新居浜別子山線」（青龍橋）